

『西行物語』の方法

——東海道を歩む西行——

サイ ハイセイ
蔡 佩青

はじめに

西行が生涯に二度、陸奥を旅したことは彼の家集『山家集』によって確認されている。しかし、西行没後五十年も経たぬうちに流布し始めたとされる『西行物語』では、陸奥への旅は西行の生涯一度きりの旅とされ、その旅は、西行にとって最も峻厳な修行の旅として位置づけられている。『西行物語』は夙に「西行名歌集」と称されるように、西行歌を取り入れながら西行の伝記を綴っていく創作方法を有している。ところが、西行の東下りの〈場〉となる東海道での記述は、西行歌を用いなくて記されたり（天竜渡り受難事）、物語作者の創作歌によって創り出されたり（岡部宿同行死去事）している。

本発表では、西行が岡部宿で同行の死に遭遇する挿話を中心に、『西行物語』諸本の描写の異同を検討しつつ、現在岡部町に伝えられている西行・西住伝承の方法を考えてみたい。

一、『西行物語』の諸本分類

『西行物語』の諸本研究について、夙に伊藤嘉夫氏、坂口博規氏、千野香織氏、高城功夫氏、礪波美和子氏等によって、各伝本の成立とその前後関係や、先行説話との伝承関係などが解明され、定説化をみている^①。主な『西行物語』伝本は「広本系」「略本系」「采女本系」「永正本・寛永本系」のように分類されている。「広本系」と「略本系」は、物語の分量及び文章の類似によってまず分けられている。また、それとまったく異なる構造を持ち、絵巻として

江戸時代に大量生産されている采女本系があり、そして広本系と略本形のそれぞれの特徴を示す挿話を併せ持ち、さらに独自の西行説話を有している、所謂中間本系の「永正本・寛永本系」がある。最後に、以上のいずれの分類にも該当しない、島原図書館松平文庫所蔵本と学習院大学日本語日本文学研究室所蔵本があり、これらは差し当たり「松平本系」と呼んでおくこととする^②。

これらの分類のなかで、広本系と略本系は、他伝本に比べ物語の構成が整っており、成立時期も早いとされるために、『西行物語』における西行像を検討する際には一般的にこの両伝本を用いることが多い。広本系と略本系との間の、最大の相違点は西行出家後の吉野・熊野・大峰への旅の記述の有無にある。

さて、西行の陸奥への旅の経路を見ると、下記の図で示したように、西行は都を出てまず伊勢神宮に参詣した。次に東海道に入り、遠江国、相模国、武蔵野という順で陸奥国に至った。さらに細かく地名を辿っていくと、例えば広本系においては、遠江国の天竜の渡し、小夜の中山を越え、駿河国の宇津山、清見が関を越え、さらに足柄山を越えて初めて相模国の地名が記される。いわば東海道は、西行の東下りの最も重要な場所として設定されていると言えよう。ところが、略本系における西行の東海道の旅は、広本系と異なる物語の様相を見せている。即ち、西行は天竜川を渡った後に、駿河国岡部宿で同行の死の消息を聞かされることになったのであり、岡部宿が小夜の中山と宇津山の間に挿入されるのである。

【西行の陸奥への旅の経路】

〔広本系〕

吉野山→大峰→津の国→都→太神宮→東国（**遠江国**、相模国、武蔵野、陸奥国）→都

〈東海道〉天竜の渡し・小夜の中山・宇津山・清見が関・足柄山

〔略本系〕

太神宮→東国（**遠江国**、**駿河国**、相模国、武蔵野、陸奥国）→都

〈東海道〉天竜の渡し・小夜の中山・**岡部の宿**・宇津山・清見が関・足柄山

二. 岡部にて同行の死に遭遇する西行

『西行物語』において、西行が出家を決意する際に四歳になる愛娘を縁の下に蹴落とした場面を、物語のクライマックスと言うならば、天竜の渡しで武士に鞭で頭を打ち割られた事件は、物語の中の最もドラマチックなエピソードということになろう^③。西行は、同行の入道と共に天竜の渡しで大勢の人が乗った船に便乗した際、乗り合わせた武士に船を降りろと命じられたものの、渡船場の習いと思い、降りようとしなかった。すると、武士に鞭で頭を叩き割られ血が流れるという惨事となった。同行の入道が見て悲しむ様子に、西行は修行の真義を教訓し、同行を拒否し入道と別れて一人で旅を続けた。

以降、略本系『西行物語』には次の独自の挿話が描かれている。

只独り、嵐の風身にしみて、うき事いとゞ大井河、しかひの波をわけ、涙も露もおきまがふ、墨染の袖しほりもあへず行程に、するがの国、岡部の宿と云ふ所に付きて、あばれたる御堂に立寄り、やすみて居たりけるに、何となく後ろ戸の方を見やりたりけるに、ふるき檜笠のかけられたるを、あやしと見に、すぎにし春の比、都にて、たがひに、先立ゝば、(a) 還来穢国、最初引撰の契をむすびし同行の、東の方へ修行に出し時、あながちに別れを悲みしかば、此を形見にとて、我不愛身命、但惜無上道と書きたりしが、笠はありながら、主は見えざりければ、おくれ先立ならひ、はやもとのしづくと成りにけるやらんと、哀れに覚へて、涙をおへて、宿の者に問ひければ、京より、此春、修行者のくだりてありしが、此御堂にて、いたはりをして失せ侍りしを、犬の喰ひみだして侍りき。かばねは近きあたりに侍るらと言ひければ、尋ぬるに、見えざりければ、

笠はありその身のいかに成ぬらん あはれはかなき雨のしたかな

(久保家本『西行物語』)

西行はただ一人で東に向かっている途中、駿河国岡部宿にある荒れたお堂に立ち寄って休んでいると、昔春の頃に都で互いに浄土往生の先達となる約束を交わした同行の笠がかけられているのを発見した。笠は形見として同行に渡したものである。しかし、笠はあるものの、同行はすでに旅の疲労困憊で亡くなり、屍も犬に食われ跡さえ残っていないと宿の者に聞かされた。

このくだりは、広本系に属し『西行一生涯草紙』の名を持つ伝本と、それと同系統のテキスト（以下、一生涯草紙と称す）を除き、広本系には見ないため、略本系が成立する際に挿入されたエピソードと考えられている。ところが、秋谷治氏は、これまでの永正本と寛永本を一括して「永正本・寛永本系」に分類する仕方に疑問を持ち、岡部宿同行死去事を含む諸伝本に共通する本文を比較したうえで、寛永本には一生涯草紙に近似している詞章及び挿話が多々あることから、『西行物語』の原型を考える上で看過できない一伝本であることを指摘した^④。

寛永本『西行物語』は、岡部宿同行死去事を次のように描写している。

西行只一人、嵐の風身にしみて、憂き事いとゞ大井川の四海の浪を分て、
やそせのみわたる袂しほりあへずして、駿河国岡辺の宿に、古堂に立寄て、
休つゝ、後戸の方様を見れば、古檜笠の掛られたるをあやしと見れば、過
ぎぬる春、都にて、(b) 一蓮の上にと、契を結たりし同行の、東の方へ
修行に出し時、あながちに別を惜しかば、是を形見によとて、我不愛身命、
但惜無上道と書たりし笠也。主は行方もみえざりければ、心うくて、をく
れ先立ためし、末の露もとの雫と消ける哉らんと泪もとゞまらず、宿の人
に尋ぬれば、此春修行者下だりしが、其堂にて、世心ちをして失にしを、
犬喰散て侍りきと、云ば、かばねは有らんと云、尋ぬれ共、無りければ、
笠はあり其身は如何に成ぬらん 哀はかなきあめが下かな

（寛永本『西行物語』）

秋谷治氏は、この挿話を以て略本系の久保家本の本文と一生涯草紙の描写を比較し、「この記事は一生涯草紙や寛永本が増補したのではなく、甲類にも本来存したと考えるべきなのであるまいか」と推測している。ここで言う甲類とは広本系を指している。そうだとすると、略本系における岡部宿同行死去事は広本系より伝承されてきた可能性が大きい。ただ、ここで注目したいのは、寛永本も一生涯草紙も、略本系とはさほど変わらぬ内容を伝えているが、波線部(a)と(b)にあるように、西行と同行との間に交わした契りの内容には相違が見られる。即ち、略本系の「還来穢国、最初引撰」の漢文的(經文的)表現に対し、寛永本と一生涯草紙は「一蓮の上に」としているのである。その上、永正本も「一蓮に」と表現している。従って、岡部宿同行死去事に関しては、略本系と、一生涯草紙・寛永本・永正本とに分かれて伝承されてきたと考えられる。

一方、かつては阿仏尼筆と伝えられていた静嘉堂文庫本『西行物語』では、西行の岡部で発見した笠は、「同行西住」の形見としている。次に掲げるのはそれである。

岡部の宿といふところに付きて、あれたる御堂に休みけるに、

我不愛身命 但惜無上道

と書たりし笠あり。見れば同行西住が笠也。笠はあれども、主は見えざりければ、あたりの人にとふ。答へて、この春、修行者のくだりてありしが、この御堂にて、いたはりをして失せ侍べりしを、犬の喰いみだして侍りき。かばねは近きあたりに侍べらんと言へば、尋ぬるに見えず。

かさはありその身はいかになりぬらん あわれはかなきあめのしたかな

(静嘉堂文庫本『西行物語』)

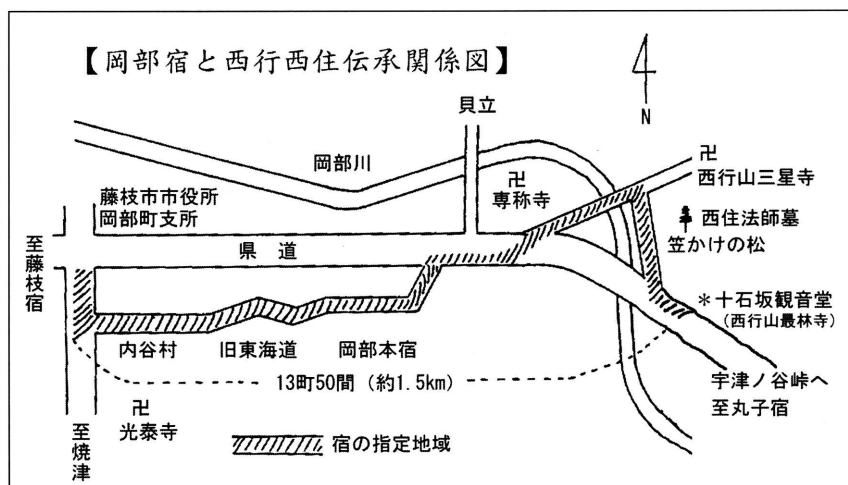
『西行物語』諸本において、これは唯一笠の持ち主の名が記されている伝本である。その上、西行家集『山家集』にもしばしば登場し、歴史上の西行の生

涯の友であるとされている西住と明記している。本来、該当する描写は物語の展開を左右するほどの改編となろうが、『大般若経』の紙背を用いての書写のため紙数の制限を受けており、「省筆甚しく、改竄されている疑い」があり^⑤、「前半の西住出家に付けあわすべく、あえてその最期を同行客死の話に求めようとした意図が明らか」であると、多くの先行研究は指摘している^⑥。

しかしながら、本文批判はしかるべきであっても、説話が流布する際には、それと全く関わらない形で伝承されていくこともある。

三. 岡部における西行西住伝承

現在、静岡県藤枝市岡部町にある小さな丘・岩鼻山の頂に西行笠懸松と西住法師墓が存している。旧東海道沿い、岡部宿の中心部よりやや離れたところにある。麓に西行山と号する曹洞宗の寺院・三星寺がある。三星寺の開創について記されている古文書によると、三星寺の草創縁起は不詳であるが、西行が諸国行脚の折に立ち寄った場所であり、また弟子西住の臨終の地でもあることから西行山と号したという^⑦。また、岩鼻山自体が西行山と呼ばれる記録も見ら



*本図は、『藤枝・岡部のあゆみ』に収録されている「岡部略図」(P.7)を増補して作成した^⑨。

れる^⑧。

その他、岡部宿の東の終わりを示す十石坂観音堂と、西住法師墓の近くにある専称寺も、西行ゆかりの地とされている。「岡部宿と西行西住伝承関係図」で示したように、岡部町に伝わる西行・西住の伝承の〈場〉は、小夜の中山の次の難所である宇津ノ谷峠の前に集中している。

十石坂観音堂はかつては西行山最林寺と号し、西行の持念仏とされている千手観音菩薩像が本尊として安置されていた。のち、柑本昌基（南浦）という人が奉納した西行の坐像が納められ、千手観音菩薩像と共に岡部町有形文化財として指定されている。ところが、最林寺は明治時代に廃寺となり、観音堂のみ残されている。そして千手観音菩薩像は約三十年前に盗難に遭い所在不明のままであり、西行坐像は現在専称寺に安置されている^⑩。

岡部における西行西住伝承について、書物によって異なる内容が伝えられているが、いずれも『西行物語』に基づき、岡部という〈場〉に密接に関わる素材が付加されて構成されている。次に掲げるのは天明六（1786）年秋起草の『東街便覧図略』に記されているものである^⑪。

西行笠掛松

岡部の宿を過て宇津の山にかゝる左の片山の上に西行の笠懸松といふあり。里人伝て云ふ。むかし西行法師爰に山居ありしが、最林といへる弟子を此所に残し置て又修行の旅に趣んとする時、最林ふかく師の別れを悲しみしかは則、着るところの笠を此松の枝にかけて是我姿を留る也と有し。其古跡なりとそ。辺り近き西行観音堂より出板の絵図には法師の歌とて、

西へゆく雨夜の月やあみた笠 かげを岡辺の松にのこして
とあり。又西行物語に云く。（中略）此二説大同小異なり。何つれにも西行の旧跡なるべし。

杉森 西行観音堂

西行山最林寺と号す。本尊千手観音は、西行法師の持念仏にして、弟子さいりん建立の地たりといふ。(以下略)

(『東街便覧図略 伊豆・駿河・遠江の部』)

ここに伝わる西行の同行は、西住ではなく最林という名の弟子である。また、西行観音堂は最林の建立とし、西行の詠歌が納められているという。記事に引用されている『西行物語』は略本系の正保三年版本に酷似している本文であるが、物語中の「笠はあり」の歌は、同行と都で別れた際の詠歌としている。ところが、「此二説大同小異なり」との作者の記述はあるものの、「西へゆく」の歌は『西行物語』に伝わっておらず西行や西住の詠歌でもない。『国歌大観』にも収録されていないため、恐らく観音堂に伝わる伝承歌か作者の創作歌であろう。因みに、この歌は現在岡部町に西住の歌として伝承されている¹²⁾。

『東街便覧図略』は尾張藩高力種信が東海道を旅して描いた尾張から江戸までの道すがらの絵図である。当時はすでに西行笠懸松と西行の持念仏が伝わっており、西行の同行の最林の名は観音堂の寺号に因んで伝承されているように思われる。西行（西住）の伝承歌と遺失した千手観音菩薩像の由来については、これより古い文献はまだ見当たらないため、今後の課題として調査し続けたい。

一方、現在岡部町に伝わる西住法師墓については、岡部町史、静岡県史をはじめとする殆どの記録が次に掲げる、江戸後期に製作された駿河国の地誌『駿河記』が記している「桑門西住事状記」によるものである。

桑門西住事状記曰

桑門西住者姓名某。武衛校尉佐憲清一作義清非也家臣也。保延三年八月。

同其主脱世絆。而改名西住。(中略)

乃従西行東遊。芭鞋竹箆瓢々乎與往。及到于遠之天龍川。偶與武人同舟渡。

舟中人多而殆将顛覆。武人呼曰。僧等下。西行謂。得便船者豈非雲水之常

乎。因不肯下。一人突然以箠毆西行。血淋漓染衣。西行自若無憤怒之色。
徐々下舟。西住乃勃然起色。勵聲一呼。以錫杖擊乎其面。卒隸驚騷。不能
敢當。狼狽而走。西住猶追逼之。杪者為禁紛擾。走者悸稍定。西行進謝曰。
野弟不遜之為。實出卒意。敢望恕宥。於是敵者諦視其骨相不凡。辭氣溫雅。
無復爭鬪事一以解。西行天龍之難。其事詳于西行發心記。既而西住從西行絕堰水。跋涉漸遠。羸蹇之餘。中途得疴遂卒于岡部里傍山翠微中。(中略(a))
實延保三年九月廿八日也。西行訣西住和歌。及寂然弔詞。並所載千載集者如左。

千載集卷第九哀傷哥

同行の上人西住秋の頃わづらふことありてかぎりに見て待ければよめる

圓位法師

もろともにながめながめて秋の月、ひとりにならむことぞ悲しむ

西住法師身まかりける時、をはり正念なりけるよしを聞、圓位法師のもとに遣し侍る。

寂然法師

みだれずと、をはり聞こそうれしけれ。さても別はなくさまねども、かへし

圓位法師

此世にてまた逢まじきかなしさに、すゝめし人ぞ心亂れし、
里人為葬之。築墳建碑。以識其處。碑蓋鱗形。今尚舊崩。嚴然存焉。後人過者莫不欽英風也云。(中略(b))
吁人去境留。久之境亦將煙沒焉。獨不朽者名而已。以名繫境。記而傳之。庶乎其不朽矣。

元文元年丙辰八月十五日

東都南浦柑本昌基撰

甲斐信濃守從五位下源光章書

此事狀記は内谷杉山氏所藏なり。

*中略は『駿河記』編纂者按の部分である。また、歌に付した句読点はテキストのままである。

『駿河記』は文化九（1812）年に駿府奉行服部久右衛門貞勝によって企画された『駿河大地誌』の前身である。編纂時に各郡の調査担当者が相次いで亡くなったため、志太郡を担当する桑原藤泰（黙斎）が最後まで独自調査し、文政三（1820）年に遂に原稿を完成し、『駿河記』と名を改めた。『駿河記』において、「西住法師の墓」の条に上記の記事が収録されている。記事の最後に「此事状記は内谷杉山氏所蔵なり」とあるように、西住伝承は杉山氏が所持する資料より転写したものである。漢文で記されたこの伝承は、『西行物語』の伝えている西行の天竜渡り受難事を物語の中心としている。ただ、『西行物語』には天竜の渡りで西行と同行したのは「同行の入道」としているのに対し、「桑門西住事状記」には西住としている。そして、武士に叩かれた西行を見て、西住はただ悲しく見守るのにとどまらず、直ちに顔色を変え錫杖を以て反撃し武士の顔を殴った後、西行の誠心誠意の陳謝によって事件が解決されたという、『西行物語』に見られない劇的な展開をしており、更に、西住は西行と共に大井川を渡り、遂に岡部で病で「延保三年九月二十八日」に死去したとされている。

西住の没年について、「延保」という年号は存在しないが、『吾妻鏡』には西行の出家時期が保延三年八月と記録されているため、そこから連想し創作したものであろう。仮に「延保」は「保延」の誤りとしたら、「桑門西住事状記」の冒頭に書かれた保延三年八月に西行と共に出家した描写に沿って考えると、西住は西行と出家後すぐ東下りをし、同年九月末に亡くなったということになる。無論、西行の出家と西住の死去の年については、いずれも史実と合致していないのである^⑬。

しかし興味深いことに、『駿河記』の記事は単なる編者による資料収集・転

写のみで完成したものではない。編者の手による補足説明にも新たな伝承が創出されているのである。例えば上記の引用文中の中略(a)は編者の補足説明で、そこには『吾妻鏡』に書かれた西行と源頼朝との鎌倉八幡宮で対面した名場面について言及している。『吾妻鏡』には、源頼朝が歌道と弓馬の事を尋ねたところ、西行は、自分は遁世時に兵法の書を焼き捨てた身であり、和歌も奥義までは知らず、ただ興に従い詠歌する程度だと答えたと言われている。ところが、『駿河記』は西住を引き出すため、更に二人の対話に「譚餘及天龍之難。西住尚不能忘節義。」を付け足し、「幕下聞而壯之」と西住の西行受難に対する言動の正当な評価にまで言及している。

加えて中略(b)は、「一説」として『西行物語』の如く二人は天竜の渡りで別れたと伝えている。但し、ここにもまた次に挙げるように、独自の物語が展開されている。

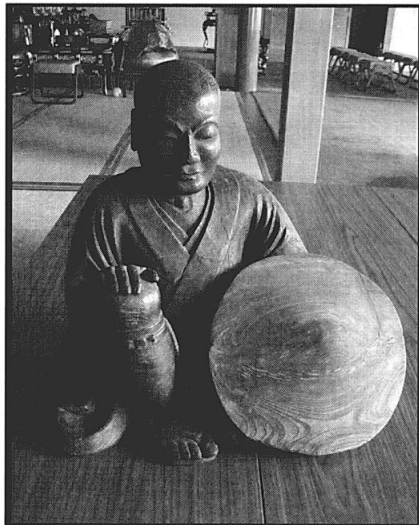
於是西住皇々焉如兄失慈母。悲歎愁絶將不自勝。有池田長者。為謂之曰。子行事固不為無理。然師命而違之可乎。西住曰。今辱見開諭。敢不受教。某荷師恩有年矣。然未嘗一有違一其命。而今適如此。是吾命窮盡之時。為人之臣僕苟背主命。不死何持。乃欲自裁。而懼其非緇徒行。且似果於怨者。於是纔然將追及其師

池田長者回答。詳于熊野寺僧録。

(『駿河記』)

波線で示したように、西住は西行に同行を拒絶された後、幼き子の母を慕う如く嘆き悲しんだところ、池田の長者に慰められたが、師西行の意思に背いたことは死を以て謝罪するほかないと思いながら、僧侶の身分を案じ遂に西行の跡を追ったとある。また、このことは「熊野寺僧録」に詳しく記載されているという。「熊野寺僧録」についてはまだ手掛かりがないが、池田とは天竜川の左岸にある池田宿のことであろう。天竜の渡りで西住が武士と争ったくだりについて、謡曲「西行西住」にも類似した場面はあるが、池田長者の挿話は岡部

【西行坐像】



【西行笠懸松と西住法師墓】



* 撮影：発表者

独自の西住伝承である。

「桑門西住事状記」を記録した柑本昌基は、本記録を所蔵している杉山氏と交友関係を持っていることは杉山家に伝わる『杉山雑記』に記されている^⑭。また、『駿河史料』には、上記の記録を仮名文によって要約し再録されており、頭注には「本文は元文中江戸人柑本昌基が真名文に^(ママ)せ記しを、里人通世が假字に記せし鑑擧ぐ」とある。通世とは河野蓼園のことであり、『駿河大地誌』編纂時に益津郡と志太郡の調査を担当した人物である。十石坂観音堂境内に杉山佐十郎が建てた「河野蓼園碑文」がある。そこで、柑本昌基と河野蓼園とは、二人とも杉山家と交流があるため、河野蓼園によって柑本昌基撰の西住伝承が伝わったと考えられよう。

更に付け加えれば、現在専称寺に安置している西行坐像は、底部の銘文によって柑本昌基（南浦）が享保十一（1726）年に奉納したことが分かる^⑮。以上のことにより、岡部町に伝わる西行西住伝承は柑本昌基に大いに関与していると言える。

また、「桑門西住事状記」を清書した甲斐信濃守源光章（1711-1782 年）の、その名は寛政二（1790）年刊の『近世畸人伝』に見られ、『甲斐名勝記』の天明二（1782）年に記した序文の撰者でもある。源光章、河野蓼園と杉山佐十郎の三人の年紀を照合してみても矛盾はないように思われる。

四. 西住の死

岡部町に伝わる西住法師墓の伝承は、後世の人が『西行物語』における岡部宿同行死去事を増補・改編して完成した新たな西住伝承である。一方で、西住の死を伝える説話は、早くも十三世紀中期の成立とされている『撰集抄』によって生成されている。『撰集抄』は、『山家集』に収録されている寂然と西行の贈答歌を素材にし、西行は西住の最期を見届け、彼の遺骨を高野山に納めたことを記している。

同行に侍りける上人、終りよく思ふさまなりと聞きて申し送りける
寂然

乱れずと終り聞くこそうれしけれさても別れは慰まねども
返し
この世にて又逢ふまじき悲しさに勧めし人ぞ心乱れし

とかくのわざ果てて、後の事ども拾ひて、高野へまゐりて帰りたり
けるに
寂然

入るさには拾ふ形見も残りけり帰る山路の友はなみだか
返事

いかにともし思ひ分かずぞ過ぎにける夢に山路を行く心地して

（『山家集』 八〇五～八〇八）

『山家集』が記した「同行に侍りける上人」は即ち西住のことである。桑原博史氏は、西行が西住をしきりに「同行に侍りける上人」と呼んでいる理由は、「自分より先立った西住に対する哀惜の念」であるのみならず、宗教者としての西住は、「西行をリードしている面があったのではなかろうか」と指摘している¹⁶⁾。それなら、西行と西住の二人の関係をいち早く理解し説話化したのは、『撰集抄』の作者とも言えよう。『撰集抄』には、西住の死について次のように描かれている。

西住聖人、わづらいの事侍りと聞きしかば、今は限りの対面もあらまほしく覚えて、高野の奥より都に罷り出でて、聖のいほりに尋ね行きて見侍れば、事の外におとろへて、はかばかしく物もいひやらぬ。我をうちみて、嬉しくとて涙ぐみし事の哀に覚え侍りて、そゞろに泪を落し侍りき。閑居のつれづれをば、我こそなぐさめ申すに、そこのひとり残り給ひて、いかにおほくなげかむとて、袂をしほり侍れば、たゞあわれさ身にあまりて、其の夜は留まりて、よろづひまなく、後のわざならんど聞えしかば、さり共、やがて事はきれじとこそ思ひ侍りしに、其の暁、西向きて念仏して終りを取り侍りき。今の別れは実に悲しく侍れ共、一仏浄土の再会はさり共と、心をやり侍りて、涙をおさへて、最期の山送りして、泣く泣く煙となし、骨を拾ひとりて、高野にと心ざし侍りき。

(松平文庫本『撰集抄』 卷六第四話「西山上市人併西住死去事哥」)

この説話では、『撰集抄』の語り手〈西行〉(以下、〈西行〉と示す)はただ泣き泣き西住の最期を見守ったように描写していると受けとられがちであるが、往生者の遺骨を高野山に納めることは、浄土へ導くための結縁であることが読み取れる。同巻第八話にも類似の挿話が記されている。

我、世を背きて広く国々を経廻りしに、貴き人々あたま見侍りしかども、

かゝる人にいまだあはず侍りき。さても、最後臨終にもあひ、煙ともなし奉り、骨を拾ひ高野にも攀ぢのほり、彼聖たちの筆の跡をもとり留め、歌をも詠じ侍れば、定めて彼二所の力にて、我も浄土へ道びかれ奉らんと覚えて、嬉しく侍り。

(松平文庫本『撰集抄』巻六第八話「佐野渡聖事」)

西住の場合は、『山家集』が記した詠歌事情を素材にしたことは容易に推測できる。一方、佐野渡聖の挿話は、〈西行〉と二人の禅僧との出逢いをより物語性のある内容を見せながら、高野山納骨は〈西行〉を浄土へ導くための結縁の手段であると強調している。それに対し、略本系『西行物語』が描いた同行(西住)の往生は、作中で主人公の西行が唯一遭遇した往生者でありながら、遺骨が見付からなかったため納骨もできなかったのである。或いは東下りの途次であるゆえの設定かもしれない。更に言えば、天竜川の渡りで同行の連立ちを拒絶した西行の、「ただ一人、嵐の風身にしみて」流離う修行者のイメージを造形するためとも考えられよう。

おわりに

天竜川は東下りの際に難所小夜の中山を越える前に必ず渡る川である。時代は下るが、天正三(1575)年二月十六日の「徳川家康朱印状写」によれば、天竜川池田渡で船が遅いために船頭を打擲することが禁じられているという^⑪。略本系『西行物語』においても、西行が武士に降りよと命じられた時、「渡りの習ひ」と思い聞き入れなかったため鞭で打たれた様子が描かれている。そして、小夜の中山を乗り越え、次の峠＝宇津ノ谷峠を登る前に、しばしの休息が必要となった、そこが岡部宿である。西行が岡部で同行の死に遭遇したことは、『撰集抄』が描いた世捨て人の発見者としての〈西行〉の姿を髣髴とさせる。『西行物語』と『撰集抄』との成立関係について未だ解明されていないが、“中世西行伝”の編成を目的とする創作意図は、両書に共通しているのであろう。

『西行物語』は書写・流伝される段階で、それぞれ書写者（編著者）によって理想的な西行像が創り出された。それは、物語を享受する後の文芸に豊富な素材を提供した。天竜渡り受難事と岡部宿同行死去事を同時に取り入れた謡曲「西行西住」はその好例であろう。西住と天竜川で別れた西行は、東国の旅を終える帰り道に、岡部で一夜の宿を求める際に、笠を残して往生を遂げた修行者＝西住の話を聞かされた。笠は西行の手跡が書かれた形見であるという『西行物語』での設定は巧みに利用され、謡曲中の重要な道具となった。

そして、「桑門西住事状記」や、それを転写・伝承する作品『駿河記』のごとくさらに独自の伝承が生み出されていったのである。岡部で伝承される西行笠懸松と西住法師墓の故事伝説は、実に多種多様である。その大半は中世説話を享受しながら更なる劇的効果をもたらす内容となっている。日本各地に伝わる西行伝承の多くは、西行はその地に立ち寄っていないが、西行歌ないし西行伝承歌が機縁となって形成されたのに対し、岡部の西行西住伝承は西行説話を踏襲しながらも大きく逸脱せず、物語とその発生の舞台を重視して伝承している。説話の最大の特徴は“モノガタリ”を口伝えないし書き伝えを媒介にして伝承することにある。それに従って、岡部における西行西住伝承も中世の説話世界との隔たりを最小限に保とうとする形で伝承されていると言えよう。伝承は常に物語の原型から徐々にかけ離れていくが、岡部の西行西住伝承はテキストの伝わる空間を記憶し続けているのである。

【注】

- ①伊藤嘉夫「西行物語のたねとしくみ」『跡見学園国語科紀要』第十二巻、1964年3月。坂口博規「『西行物語』の成立時期をめぐって―絵巻と物語の関係を中心に―」『駒沢大学文学部研究紀要』第三十四号、1976年3月。同氏「『西行物語』考」『駒沢国文』第十三号、1976年12月。谷口耕一「西行物語の形成」『文学』Vol.46、1978年10月。久曾神昇「西行文献叢刊解題」『西行全集』ひたく書房、1981年。千野香織『日本の美術1 No.416 絵巻西行物語絵』至文堂、2001年。高城功夫『西行の研究―伝本・作品・享受―』笠間書院、2001年3月。礪波美和子「『西行物語』諸本について」『人間文化研究科年報』第十一号、1996年3月。
- ②両伝本の本文は非常に近似しており、内容については、凡そ広本系『西行物語』に沿っているが、各挿話は細部が大幅に増補されている。また、略本系にのみ収められている歌があり、西行家集や

撰集による歌とエピソードの挿入も多く見られ、いずれの伝本とも異なる内容が伝わっている。ただ、松平文庫所蔵本は西行が東国から帰京する途中、美濃国に至るまでで閉じられる。学習院大学所蔵本は物語の冒頭と末尾が欠けており、本文も一部抜け落ちている。

- ③ 2000年3月26日の朝日新聞で徳川美術館本『西行物語』における西行の娘を蹴落とす場面を「クライマックス」として紹介されたのに対し、千野氏は「物語のはんの序盤に過ぎないこの絵8に対して、過剰な反応をしてしまうのだ」と述べている（前掲注①千野香織氏著書）。
- ④ 秋谷治「寛永本『西行物語』考—『西行物語』原型を探る—」『一橋論叢』八六巻五号、1981年11月。
- ⑤ 前掲注④秋谷治氏論考。
- ⑥ 山口真琴「享受と再編——『西行物語』の伝流と形成」『西行説話文学論』笠間書院、2009年8月。
- ⑦ 岡部町出身の大石美代子様より頂いた「三星寺開創備考」のコピー資料によった。
- ⑧ 『修訂駿河国新風土記』（新庄道雄、国書刊行会、1975年）には、次のように記されている。「西行山 この山の上に松樹あり、樹下に西住法師の墓とて五輪を建、松を笠掛松と唱す、三星寺の東凡登」。
- ⑨ 『藤枝・岡部のあゆみ 中学校社会科郷土資料集 改訂版』藤枝・岡部教育研究会社会科部、1996年3月。
- ⑩ 専称寺関係者の説明によった。
- ⑪ 『東街便覧図略 伊豆・駿河・遠江の部』（宮本勉翻字・解説、羽衣出版、1994年12月）の解説によると、作者高力種信（猿猴庵）自身の凡例では本書は天明六年の晩秋に行った旅中の随筆だと記されているが、完成した時期は寛政七（1795）年説が有力であるという。
- ⑫ 『岡部のむかし話』（静岡県志太郡岡部町教育委員会、初版1978年）には「西住笠懸けの松」として西行西住伝承が取り上げられている。そこには、「西へゆく」の歌は西住が臨終時に笠に書いた歌としている。また、現在岩鼻山の麓に掲げる案内も同じ内容である。
- ⑬ 西行の出家時期について、『台記』永治二年の条に記されている保延六（1140）年10月15日であることが定説とされている。また、西住の死は『山家集』によって嘉応元（1169）年以降とされている（『山家集／聞書集／残集』和歌文学大系脚注）。
- ⑭ 『静岡県歴史人物事典』静岡新聞社出版局編、静岡新聞社、1991年12月。
- ⑮ 西行坐像の底部に次のような銘文がある。「柑本南浦寄附 峇丙午仲秋 東都湯臺社西住主 山口長保藤原光良 彫刻之」。
- ⑯ 桑原博史「二人の西住」『西行とその周辺』風間書房、1989年2月。
- ⑰ 『静岡県史 資料編8 中世四』静岡県編集発行、1996年3月。

※本文引用は、久保家本『西行物語絵巻・詞書』、静嘉堂文庫本『西行物語』、松平文庫本『撰集抄』は『西行全集』（日本古典文学会）に、寛永本『西行物語』は前掲注④秋谷治氏論考に、『山家集』は和歌文学大系21『山家集／聞書集／残集』（明治書院）に、「西住桑門事状記」は『駿河記』（桑原黙齋編、臨川書局、1974年）に、『東街便覧図略 伊豆・駿河・遠江の部』（宮本勉翻字・解説、羽衣出版、1994年12月）に、それぞれに拠った。但し、私に適宜表記を改めた箇所や、傍線・注記等を施した箇所がある。

【付記】

本研究を進めるにあたり、殊に実地調査を行う際、池谷圭次様（駿河国田中城跡保勝会会長・前岡部町教育委員会社会教育指導員）、大石美代子様をはじめ、岡部町の方々から有益なご教示及び多大なご協力を賜りました。また、専称寺に取材と貴重な文化財の撮影を許諾して頂きました。この場

をお借りして感謝の意を申し上げます。

*** 討議要旨**

渡辺憲司氏は『駿河記』の成立についての意見を求めた。それに対し、発表者は『駿河大地誌』が調査担当者の相次ぐ死によって文化九年に一旦編纂が途絶えたのを、文政三年に桑原黙齋が独自に完成させたものであると回答した。横井孝氏は、岡部という土地の特殊性について質問した。それに対し発表者は、岡部はいわゆる昔ながらのムラ意識が残っている土地であると回答するとともに、岡部の西行伝承が『駿河記』にのみ拠っていることを報告した。それを受け、横井孝・大高洋司両氏からは、海道筋にある岡部には中世期の説話が残存している可能性が指摘された。